

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 28 年 11 月 30 日現在

機関番号：23301

研究種目：基盤研究(A) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25244008

研究課題名(和文) 日本における「美術」概念の再構築 語彙と理論にまたがる総合的研究

研究課題名(英文) Toward Updating the Concept of Bijutsu (Art) in Japan - Comprehensive Research of Terms and Theories -

研究代表者

山崎 剛 (YAMAZAKI, Tsuyoshi)

金沢美術工芸大学・美術工芸学部・教授

研究者番号：70210391

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 28,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、“概念としての「美術」”に関わる先行研究を踏まえ、日本の「美術」を語る体系全体とそれに従う語彙を検討し、理論的に探究すること、そして、日本における「美術」概念を再構築(アップデート)するための開かれた議論の場を生成することを目的とした。「美術」概念が西洋のコンテキストから他の国々へ輸出されていく過程を再考するなかで、日本美術の研究・展示・蒐集がいかに19世紀末の西洋の語彙によって形作られているかを検証し、今日普遍的に理解されている分類とそれをめぐる様々なシステムに対処するための議論を、国内外での研究会とシンポジウムおよびアジア調査等で実践して、研究を深化させた。

研究成果の概要(英文)：This research focuses on System of “Bijutsu (Art)” in Japan and its terms and theories, and offering the open discussion for updating the concept of “Bijutsu” (Art) in Japan. Through the reconsideration of process of exporting the concept of “Art” from western to non-western countries, it was examined how today’s research, display and collecting of Japanese art are shaped by late nineteenth-century western terms. We organized several symposiums and investigations in Asian countries, to deepen discussions on the universally understood genres and their systems.

研究分野：日本美術史、工芸史

キーワード：日本における「美術」概念 美術と工芸 古美術と近代・現代美術 研究・展示・蒐集 伝統と文化  
日本・アジア・西洋 オリエンタリズムとジャポニスム ポストコロニアル

## 1. 研究開始当初の背景

私たちは、2010～2012 年度科研「近代日本工芸、デザイン史基礎資料の総合的調査研究」(基盤研究(B) 研究代表者: 森仁史)において、日本の工芸・デザイン作品の検索システムの構築を行った。その際、作品を記述する体系や用語が西洋で形成されたものであるために多くの不合理と困難があることに改めて気づいた。確かに西洋の美術史学が体系化した手法や言語が一定の先駆性をもち、普遍的なツールとなりうる利便性を備えていた。しかし、西洋的な手法で日本をはじめとする東洋の作品を定義し記述することには根本的な齟齬があり、部分的な手直しでは対応できないと感じた。

## 2. 研究の目的

本研究では、近代日本が西洋から受容した“概念としての「美術」”にかかわる先行研究の成果を踏まえ、日本の「美術」を語る体系全体とそれに従う作品記述の語彙を検討し、理論的に探究すること、そして、日本における「美術」概念を再構築するための開かれた議論の場を生成することを目的とした。

## 3. 研究の方法

「美術」概念が西洋のコンテキストから他の国々へ輸出されていく過程を再考するなかで、日本美術の研究・展示・蒐集がいかに19世紀末の西洋の語彙によって形作られているかを検証し、今日普遍的に理解されている分類とそれをめぐる様々なシステムに対処するための議論を、国内外での研究会8回とシンポジウム7回およびアジア調査2回等で実践して、研究を深化させた。

## 4. 研究成果

### (1) 研究会

#### 第1回研究会 西洋部会

2014年1月13・14日、ロンドン芸術大学

渡辺俊夫(ロンドン芸術大学)の進行による研究会。森仁史(金沢美術工芸大学)によ

る「日本「美術」概念の再構築に向けて」、マーガレット・アイヴァセン(エセックス大学)による「アロイス・リーグルの装飾論(1893年)について」、ニコル・ルマニエール(大英博物館、ノリッチ大学日本芸術研究所)による「美術はアートではなく、クラフトは工芸ではない」(渡辺代読)の発表の後、全体討議を行った。

#### 第2回研究会 近代美術部会

2014年1月26日、東京文化財研究所

山梨絵美子(東京文化財研究所)の進行による研究会。青木茂(美術史家)による「東京芸術大学資料館所蔵品目録編纂作業について」、山梨絵美子(東京文化財研究所)による「矢代幸雄の日本美術品分類 - 美術研究所の作品・文献カード分類と日本美術年鑑の分類を中心に -」、鯨井秀伸(元愛知県美術館)による「愛知県美術館の所蔵品目録データベース作成作業から見たこと」の発表の後、全体討議を行った。

#### 第3回研究会 古美術部会

2014年2月1・2日、京都工芸繊維大学

並木誠士(京都工芸繊維大学)の進行による研究会。テーマを「茶道における『美術』と『工芸』」として、熊倉功夫(静岡文化芸術大学)による「茶道における『美術』と『工芸』」の発表の後、加藤哲弘(関西学院大学)、下原美保(鹿児島大学)、中川理(京都工芸繊維大学)、高木博志(京都大学)の4氏がコメントし、全体討議を行った。また、青木美保子(京都女子大学)の解説で京都工芸繊維大学美術工芸資料館の「染色芸術の世界 - 鶴巻鶴一と中堂憲一 -」展を見学した。

#### 第4回研究会 アジア美術部会

2014年2月25・26日、福岡アジア美術館

後小路雅弘(九州大学)の進行による研究会。初日は北澤憲昭(女子美術大学)による「「美術」をめぐる分類を改めて問うことの根本的意義」、カン・ミンギ(弘益大学)による「近代における韓国絵画」の発表の後、

ガン・ケンエン(国立台湾大学芸術史研究所)、クォン・ヘンガ(弘益大学)がコメントし、全体討議を行った。二日目は、キム・ジョンソン(東亜大学)による「朝鮮美術展覧会日本人審査員」の発表の後、全体討議を行った。また、福岡アジア美術館の「東京・ソウル・台北・長春 - 官展にみる近代美術 - 」展、石橋美術館(久留米市)の常設展示を見学した。

#### 第5回研究会 現代美術部会

2014年4月5日、東京都現代美術館

森仁史(金沢美術工芸大学)の進行による研究会。神野真吾(千葉大学)による「全体社会システムを装うアートワールドと、サブ社会システム芸術」、福住廉(美術評論家)による「「民俗」と「美術」」の発表の後、全体討議を行った。

#### 第6回研究会 工芸部会

2014年6月14・15日、金沢美術工芸大学

山崎剛(金沢美術工芸大学)の進行による研究会。黒川廣子(東京芸術大学大学美術館)による「東京美術学校の美術工芸科をめぐる」、木田拓也(東京国立近代美術館工芸館)による「昭和戦前期の「工芸美術」概念の朝鮮への輸出」の発表の後、橋本真之(金沢美術工芸大学)がコメントし、全体討議を行った。また、金沢美術工芸大学美術工芸研究所蔵工芸品の実見も行った。

#### 第7回研究会 現代美術部会

2014年7月6日、東京都現代美術館

加藤弘子(東京都現代美術館)の進行による研究会。白川昌生(アーティスト)による「生活の場所でアートする」の発表の後、加藤弘子(東京都現代美術館)、西川美穂子(東京都現代美術館)、吉崎和彦(東京都現代美術館)がコメントし、全体討議を行った。

#### 第8回研究会 西洋部会

2014年9月6・7日、シカゴ大学

チェルシー・フォックスウェル(シカゴ大学)の進行による研究会。セッション1「「美術」とそれに対する不満」では、森仁史(金

沢美術工芸大学)による「日本における「美術」概念の創設再考」、ヤンフェイ・ジュ(シカゴ大学)による「Meishu: 清朝末期及び中華民国時代における美術概念の変遷」、ポール・ブッシュ(ノースウェスタン大学)による「グローバル・エスティックとしてのジャポニスム」の発表を行った。セッション2「ハイ/ロー、中心/周辺: 近世における変遷」では、アントン・シュワイツァー(チューレーン大学)による「建築におけるハイとロー: 京都の角屋揚屋」、若松由里香(ハーヴァード大学大学院博士課程)による「ハイブリッド・ランドスケープ?: 奥原晴湖の隅田川屏風」、エレナ・ヒャン(シカゴ大学大学院博士課程)による「マージンにおける色彩: 19 及び20 世紀韓国美術」の発表を行った。セッション3「争われる「工芸」: 戦後及びそれ以後の日本における「もの」」では、山崎剛(金沢美術工芸大学)による「漂流するモノ: マテリアル・カルチャーとしての漆器/モダン・アートとしての漆芸」、ジャンヌ・カツ(シカゴ美術館)による「シカゴ美術館では現代日本美術はどんな格好をしているのだろうか」、土金康子(ニューヨーク、クーパーズ・ユニオン)による「幾つもの境界を不安定にする: なぜピカソの陶器が1950年代の日本で問題となったのか」の発表を行った。最後に渡辺俊夫(ロンドン芸術大学)が総括し、「美術」概念は常に流動的であること、ナショナル以外のコミュニティーの定義も考察すべきこと、日本美術のユニークな点を強調するばかりではなく他との共通性も確認すること、西洋を単一文化圏と見ないことなどを提案し、全体討議を行った。

#### (2) シンポジウム

##### 第1回シンポジウム

2014年11月8日、福岡アジア美術館

テーマ: 「美術」にかかわる分類の検討 - 漢字文化圏を中心に -

15世紀以降のヨーロッパ人による「地理上の発見 Age of Discovery」（大航海時代）に発するグローバリゼーションの状況下で、漢字文化を共有する東アジア地域に惹起された分類闘争の経緯を、歴史的観点から検証した。日本を主たるフィールドとしながら、アジアの他地域での研究成果や実践との比較検証を行い、さらにそれらの経緯を踏まえ、美術においてグローバルとローカルが確執しつつ融合する現在に立ち至っている現況を検討した。このため、美術館における古美術系収蔵品の分類やアジアにおける新たな美術史像創出への模索を視野に収め、「地方固有の知 local knowledge」と近代知との接合、闘争の根幹と進展に焦点をあてた。

パネリスト＝山崎剛(金沢美術工芸大学)「物質文化と美術史の出会い - 工芸史の広域性と混淆性をめぐって -」、鈴木廣之(東京学芸大学)「「美術」と「工芸」の近代と前近代 - 諸ジャンル形成の条件」、林育淳(台北市立美術館)「台湾における「美術」の概念構築 - その概要と現状 -」、堀川理沙(シンガポール国立美術館)「Road to Nowhere? - シンガポール国立美術館東南アジアギャラリーからの報告 -」、佐藤道信(東京芸術大学)「美術史の枠組み」

## 第2回シンポジウム

2014年11月9日、福岡アジア美術館

テーマ：「美術」の脱植民地化 - グローバル化の中で -

植民地支配から第二次世界大戦後のポストコロニアルな状況を経て、冷戦体制崩壊後の新たなグローバリゼーション状況化に至る分類闘争の経緯を、アジア諸地域からの視点で捉えかえした。ここでは、それらを「大地の魔術師」展などヨーロッパの美術界による新たな視点の提起から、それらに対する異論を経て、福岡、シンガポール、光州、ソウルなどで実際にアジアの美術界が提起しようとしてきた近年の試みの意義と意味が提

起された。それにより、このテーマをより具体的実践的な課題として検証し、議論することができた。ここからこそ、アジア地域の我々にとって、もっとも切実で根底的な「美術」が見え始めるに違いない。

パネリスト＝後小路雅弘(九州大学)「非西欧圏における「美術」概念 - アジア美術展 / 福岡トリエンナーレの経験から -」、吉田憲司(国立民族学博物館)「アート(美術)とアーティファクト(器物) - 美術館と博物館の間 -」、シャビール・フセイン・ムスタファ(シンガポール国立美術館)「キャンピングとトランピング - 植民地的アーカイヴを通じて、非西洋的オブジェクトへの注記とともに -」、片岡真実(森美術館)「アジアにおける「ラウンドテーブル」 - 光州ビエンナーレから見えてきたもの -」(後小路代読)、金仁恵(韓国国立近現代美術館)「ポストコロニアリズム以降のアジア美術」、岡田裕成(大阪大学)「「アメリカの再発見」? - 草創期ラテンアメリカ美術史学から問う植民地美術論の現在 -」

## 第3回シンポジウム

2014年12月6日、金沢美術工芸大学

テーマ：同時代美術の動向と美術館 - 「美術」のオルナタティブをめぐって -

近代以降に構築された「美術」に関する分類は、美術それ自体の在り方の変化によっても揺さぶられ、前世紀以来、従来の分類体系では捉えきれない諸活動が「美術」の名のもとに次々と出現して、今日に至っている。アヴァンギャルド、あるいは美術のオルタネイトの台頭。同時代のこのような美術の有りようは、美術の分類を問題として浮き立たせるばかりではなく「アート」という語の多用のごとく「美術」乃至「芸術」という基本的な分類をも揺さぶる。ここでは、こうした状況が「美術」の分類に如何なる影響を与えているかを、アーティストとキュレーターの発言によってあぶりだすことを目指した。

パネリスト＝北澤憲昭（女子美術大学）「美術におけるカモノハシ問題 - アヴァンギャルドと美術館 -」、福住廉（美術評論家）「限界芸術概念の再構築」、白川昌生（アーティスト）「作品制作と収蔵されること」、加藤弘子（東京都現代美術館）「東京都現代美術館における作品の分類」、植松由佳（国立国際美術館）「日本の美術館における現代美術作品の収集、保存管理の課題」、住友文彦（アーツ前橋）「鑑賞者の複数性」

#### 第4回シンポジウム

2014年12月7日、金沢21世紀美術館

テーマ：「美術」概念の再構築（アップデート） 翻訳と変容

第1～3回シンポジウムの課題を翻訳と変容という観点から捉え、デジタル・テクノロジー以後の時代に美術をどう把握するのか、方法、領域、問題意識を模索した。このため、美術以前の造型意識の有りようを探り、アジア地域における美意識とその体系化を検証し、さらにそれらをアジアでの美の原風景の検証や19世紀ヨーロッパにおける日本美術の「発見」と認識が生んだものの検証によって、具体相とそれが孕む課題を浮かび上げ、美術の近代が抱え込む問題の大枠を確認し、近代以降に「美術」を受容した地域で展開したことの基盤を捉える議論に発展させ、グローバルゼーションのもとでの「美術」にとって喫緊の課題を議論した。

パネリスト＝森仁史（金沢美術工芸大学）「日本における「美術」概念の形成 - アジアの視野で考える -」、並木誠士（京都工芸繊維大学）「道具から美術へ - アジアの視点から -」、渡辺俊夫（ロンドン芸術大学）「近代西洋美術概念の変遷におけるジャポニスムの役割」、山梨絵美子（東京文化財研究所）「日本における美術史関連文献の分類の変遷 - 『日本美術年鑑』を例に -」、パトリック・D・フロレス（マニラ大学ヴァルガス美術館）「イメージ、装飾、芸術 - 創造的形式の歴史 -」、

稲賀繁美（国際日本文化研究センター）「文化の翻訳性序説 - 造形芸術における - 」

#### 第5回シンポジウム

2015年8月8日、京都国立近代美術館

テーマ：日本における「美術」コレクション

「美術」概念の移植以前にも、日本に美的な鑑賞は行われていた。鑑賞対象のコレクションは蓄積され、それらは一定の体系意識を保ち、個別の独自性を追求しもした。今日まで継続されたコレクションの現状報告を共有することで、日本に形成されたコレクションの特異性と存在意義を再考した。近代以降にも様々な制度的要請や諸種の経緯に迫られて独特のコレクションが形成されている。その経緯と構造を考察することで、日本の「美術」を成り立たせている諸要素を把握し、これに基づいて、さらに日本における「美術」の骨格の理解を深めたいと考えた。

コーディネーター＝並木誠士（京都工芸繊維大学）パネリスト＝佐々木杏里（手銭記念館）「手銭家の美術資料」、吉川美穂（徳川美術館）「徳川美術館コレクション - 尾張徳川家成立から美術館設立まで -」、実方葉子（泉屋博古館）「住友春翠 - 近代事業家の趣味とコレクション -」、松尾芳樹（京都市立芸術大学資料館）「図書から参考品へ - 美術教育とコレクション -」、松原龍一（京都国立近代美術館）「京都国立近代美術館の「美術」コレクションの形成について」、木戸英行（DNP文化振興財団）「DNPコレクションの歩みとこれから」

#### 第6回シンポジウム

2015年10月24日、京都工芸繊維大学

テーマ：芸道論の今日

日本でも「美術」移植以前に、いわゆる「芸」としての創作の実践や創作への考察は深められていた。これら「芸道」はその実践とともに今に引き継がれている。西洋美学とは成り立ちを異とする芸道論に改めて目を向け、その独自性と意味を考えたい。また本共同研究

がこの分野に関わる根拠を示し、さらに今日の  
実践者からの発言を聞くことによって、  
我々の依って立つべき地歩を確認した。

パネリスト = 並木誠士 (京都工芸繊維大学)  
「道具から美術へ - 問題提起として -」、森  
仁史 (金沢美術工芸大学) 「移植された美術  
- 基盤としての芸道 -」、トークセッション  
= 15代楽吉左衛門 (陶芸) × 金剛永謙 (能楽)  
コメント = 稲賀繁美 (国際日本文化センター)

#### 締め括りシンポジウム

2016年1月31日、東京都現代美術館

最後に、本研究を総括するためのシンポジ  
ウムを開催して、その成果を広く研究者やア  
ーティストと共有するとともに、今後の展望  
を検討し、議論する場を設けた。

私たちは、「美術」概念の再検討において、  
言語を手掛かりとし、その領域、構造、方法  
の直面する局面を確認しつつ議論を深めた。  
それは、美術が流通する場としてのグローバ  
リゼーション以降のアート・シーン、その中  
における美術館や美術情報の趨勢、非ヨーロ  
ッパ地域美術の現況などこれまでの到達点と  
問題状況を明らかにした。今日におけるアジ  
アの力強い動きは、世界の「美術」の状況が、  
実体としての非ヨーロッパの存在抜きには語  
りえない段階に立ち至っている。今後も、非  
ヨーロッパ地域の造形が基づく構造、語彙か  
らその意味を確かなものとするを基盤とし  
て、「美術」概念を再構築する場の生成を  
目指したこの「シンポジウム」以後の新たな  
展望を切り開きたいと考えている。

以上の研究会とシンポジウムでの研究成  
果に、アジア調査の報告や資料等を集成した  
事業報告(全320頁)をPDF形式で作成し、  
ホームページ上で公開している。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者に  
は下線)

〔雑誌論文〕(計39件)

・森仁史「Fine art から美術へ - アジアにお  
ける概念と語彙の流通 - 」、『一寸』60巻、査  
読無し、2014年、60-64頁

〔学会発表〕(計46件)

・山梨絵美子、国際シンポジウム「日本美術  
史研究の現在 - グローバルな視点から - 」、  
(招待講演)、ハイデルベルグ大学東アジア  
研究所、2014年10月24日

〔図書〕(計7件)

・森仁史、北澤憲昭、佐藤道信、後小路雅弘  
ほか著『美術の日本近現代史 - 制度、言説、  
メディア、造型 - 』、東京書籍、2014年、総  
ページ数956頁

〔その他〕

ホームページ等

<http://kanabi-kaken.info/research01/>

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

山崎剛 (YAMAZAKI Tsuyoshi)

金沢美術工芸大学・美術工芸学部・教授

研究者番号: 70210391

##### (2) 研究分担者

・森仁史 (MORI Hitoshi)

柳宗理記念デザイン研究所・所長

研究者番号: 80552992

・北澤憲昭 (KITAZAWA Noriaki)

女子美術大学・芸術学部・教授

研究者番号: 60296217

・後小路雅弘 (USHIROSYOJI Masahiro)

九州大学・人文科学研究科(研究院)・教授

研究者番号: 50359931

・並木誠士 (NAMIKI Seishi)

京都工芸繊維大学・大学院工芸科学研究

科・教授 研究者番号: 50211446

・佐藤道信 (SATO Doshin)

東京芸術大学・美術学部・教授

研究者番号: 30154074

・山梨絵美子 (YAMANASHI Emiko)

東京文化財研究所・企画情報部・部長

研究者番号: 30170575

・松原龍一 (Matsubara Ryuichi)

京都国立近代美術館・学芸課・学芸課長

研究者番号: 40270491

・伊藤嘉章 (ITO Yoshiaki)

京都国立博物館・その他部局等・副館長

研究者番号: 80213099

・青木美保子 (AOKI Mihoko)

京都女子大学・家政学部・教授

研究者番号: 80390102

・黒川廣子 (KUROKAWA Hiroko)

東京芸術大学・学内共同利用施設・教授

研究者番号: 90205229

・鈴木浩之 (SUZUKI Hiroshi)

金沢美術工芸大学・美術工芸学部・准教授

研究者番号: 60381688

・藪内公美 (YABUUCHI Kumi)

金沢美術工芸大学・美術工芸学部・助教

研究者番号: 40722674